

1 学校紹介

学区は、いすみ市の中心部になっており、産業や文化等でも中核的位置にある。本校では、校訓「がんばる子」を基に、学校教育目標を「夢・目標をもち、自ら学び・考え・行動できる児童の育成」と設定している。学校教育目標の達成に向け、言語活動・体験活動の充実、生徒指導の機能の活用を大切にしなが、日々の教育活動の実践にあたっている。

2 研究主題

**自分の考えを進んで表現し、学び続ける児童の育成
～ふきだしを活用し、学習を振り返ることを通して～**

3 研究の概要

(1) 児童生徒の実態と課題

本校の児童は、活発で各活動に意欲的に取り組む児童が多い。令和2年度までの全国学力・学習状況調査の結果を分析すると、記述式の正答率が低いことが明らかになっている。特に、根拠となる理由を言葉や数を使って説明する力に課題がある。日常の学習からも、自分の思いや考えを表出することに抵抗があったり、適切な言葉が見つからなかったりする児童が多く見受けられる。そこで、令和2年度までは国語科を中心に、自分の考えをもち、進んで表現できる児童の育成に取り組んだ。児童の書くことへの抵抗が減少するなど成果が見られた一方、書くための技能を高めさせることに課題が残った。

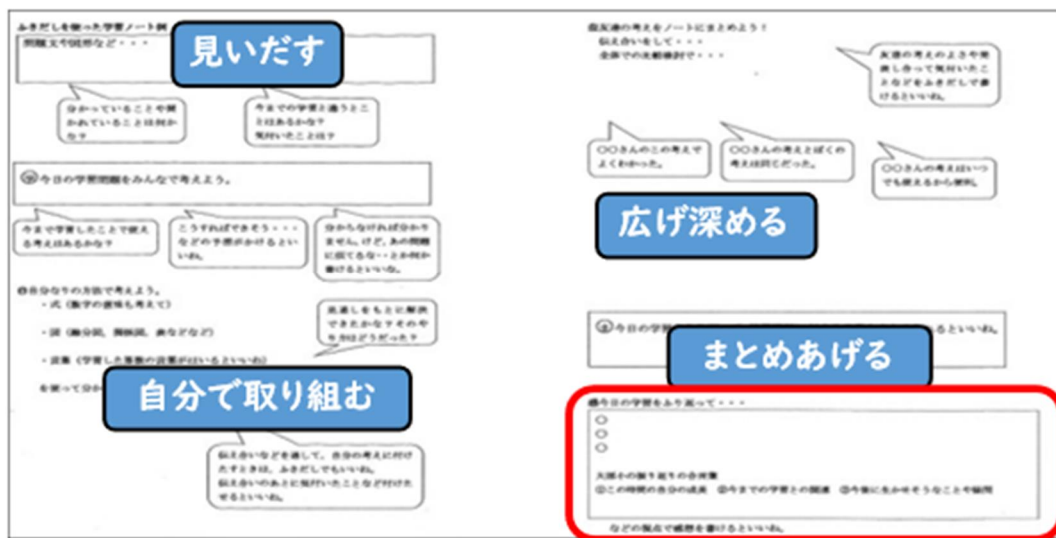
また、令和3年度の全国学力・学習状況調査の結果では、記述式の正答率が低く、根拠となる理由を言葉や数を使って説明する力に課題があった。日常の学習においても、自分の思いや考えを表出させたり、適切な言葉を見つけたりする活動を取り入れる必要があり、書くための技能を高めさせることに依然課題が残っている。

(2) 学力向上のための取組

学習の様々な場面で、児童が思ったことや考えたことを自由にノートに書かせるため、自分の思考を表出させるツールとして『ふきだし』を活用した。考えを記録させる手立てとしてもふきだしは有効である。ふきだしを活用した学習活動を進めるにあたっては、まずふきだしを活用したノート例を提示する。そして、1時間の授業を大きく4つ（問題把握、自力解決、比較検討、まとめ・振り返り）に分け、3つの場面でふきだしの中に書く視点を示す（図1）。その際、「わかった」「わからない」「できた」などの情意面のふきだしも児童の思いの表出ととらえ、認めるようにする。また、書かれたふきだしを授業の中で取り上げ、共有していくことで書くことへの苦手意識や自分の内にある思考を表出させる手助けとする。ふきだしを評価したり、「前の学習の△△を使えばできそう」「こっちの方が簡単な」のような記述を教員が授業で意図的に取り上げたりすることで、ふきだしの内容も具体的になり、自分の考えの根拠や友達の考えたことによさに迫ることができるようにした。

学習のまとめをした後、本時の自分の学習を振り返る時間を設定した。令和3年度当初は、学校全体として明確な視点を示していなかったため、児童が書いた振り返りの学習感想の内容も学級によって偏りがみられるなど、課題も多かった。そこで、学校全体で統一の視点を「わっしょい」という合言葉とした(図2)。「わかったこと」、「いっしょなこと」、「いかせそうなこと」について児童の発達段階を考慮し、低・中・高学年ブロックで、児童に書かせたい振り返りの内容の具体化を図った(図3)。自分の思考や行動を客観的に振り返ることで、自身の学習状況の理解が深まったり、既習事項の内容とつなげて考えたりするなど、学び続ける児童の育成にもつながるように取り組んだ。

令和4年度は、1年目の取組を継続しつつ、新たに3つの手立てを加えた。1つ目は、ふきだしと振り返りの内容の質的向上を目指し、教師が数学的な見方・考え方を意識した意図的な発問をするようにした。2つ目は、学習の理解を深めさせたり、つながりをもたせたりするために、キーとなるふきだしを基に振り返りを書くようにした。3つ目は、児童がじっくりと自分の考えが書けるよう、記述する時間の確保を意識した。



【図1 児童に示した「ふきだし」を使った学習ノート例】



【図2 全校統一で示した振り返りの視点】



【図3 中学年ブロックの振り返りの視点の具体例】

(3) 加配教員（学習サポーターを含む）の活用

少人数指導加配教員2名、県学習サポーター1名を各学年の算数科に毎時間配置している。主にT2として学習の補助に当たっている。また、学習内容に応じて少人数やTTと学習形態を変え、丁寧に指導している。学級内の学力差もあり、特に自力解決が困難な児童に対して、個別に助言をしたり、早く解けた児童については他の解決方法や根拠を促したりするなど、個に応じた指導・支援を行うことで、児童の学力向上につなげてきた。

4 成果

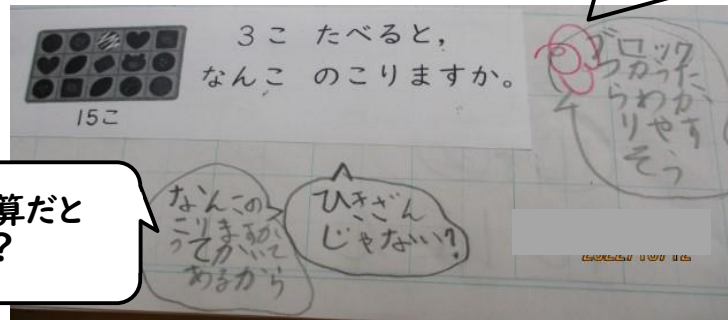
- ・ふきだしを活用することで、児童は自分の思いや気づきを表出しやすくなり、ノートに進んで自分の考えを書くことができるようになった。
- ・見通しをもつ場面で、ふきだしに自分の考えを書かせることで、振り返る際に、自分の思考の変容に気づきやすくなることが分かった。
- ・振り返りの視点を合言葉にすることで、視点に沿って振り返りを書くことができるようになってきた。
- ・児童にふきだしに書かせたい内容を明確にし、教師が意図的に発問をすることで、より数学的な見方・考え方に沿った記述が増えてきた。(図4)
- ・キーとなるふきだしを基に振り返りを書くことで、ふきだしと振り返りの内容に関連性をもたせることができた。また、次時に振り返りを取り上げることで、学習のつながりがもて、児童が学び続けるための道筋を作ることができた。(図5)

1年生「ひき算」

見通しのふきだし(2学期)

どんな便利な道具を使ったらいいかな？

何でひき算だと思ったの？



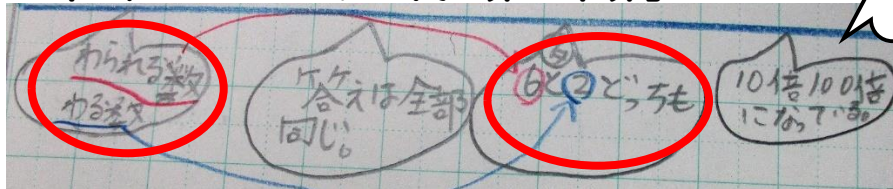
【図4 1年児童が書いたふきだし例】

1年生では、「ひき算じゃない？」というふきだしを書いた児童に「なぜひき算だと思ったの？」や「どんな便利な道具を使ったらいいかな？」と意図的な発問をしたところ、「なんこのこっていますかかってかいてあるから」や「ブロックをつかったらわかりやすそう」などの具体的な記述を加えることができた。

検証授業 9月

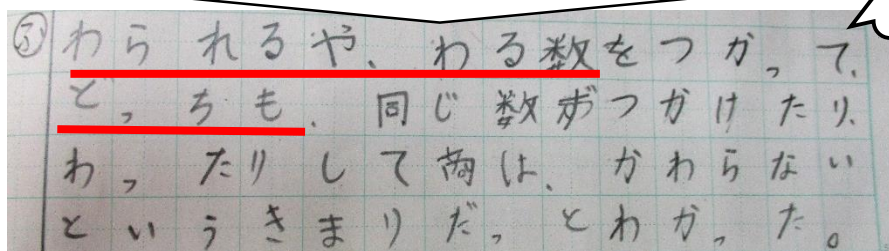
4年1組「2けたでわる割り算の筆算」

見通しのふきだし



関連

振り返り



【図5 4年児童が書いた振り返り例】

5 今後の課題

- ・ふきだしに自分の思いや気付きを書き、キーとなるふきだしを生かした振り返りができるようになっているが、記述内容に個人差がある。
- ・「わっしょい」の視点について、具体的な根拠がない記述も多い。その授業で書かせたい視点を明確化し、具体的な記述が現れるような手立てを講じる必要がある。
- ・教師が意図的な発問をするためには、継続した研究が必要である。